

小児股関節疾患の診断と治療

小児期（新生児期～思春期）に股関節に生じる運動器障害（小児股関節疾患）は多岐にわたる。しかし各疾患の発症頻度は必ずしも高くなく、さらに出生率の急激な低下も相まって、一般整形外科医が日常診療で遭遇する機会は年々限られてきている。経験が少ない場合、診断や治療方針の決定に難しさを感じることも少なくない。

発育過程にある小児では、診断の遅れや不適切な初期治療が成長障害や変形、関節機能障害を招き、その後の生活の質（QOL）に長期的な影響を及ぼす可能性がある。したがって、一般整形外科医が「何を疑い、どのように診断するか」「どこまで評価、治療を行うか」「いつ専門施設へ紹介すべきか」を理解しておくことは極めて重要である。

本特集は非専門医の先生方に向けて、小児股関節疾患の日常診療に直結する実践的知識を提供することを目的として企画した。小児股関節診療の第一線で活躍されている先生方にご執筆いただき、小児特有の疾患理解、診断の要点、最新の治療戦略、適切な介入および専門医紹介のタイミング、さらには長期予後に至るまでを臨床の視点から整理していただいた。

構成としては、まず総論において小児股関節疾患を診断する際の重要なポイントとピットフォールを概説いただいた。続いて、現在でもなお代表的疾患である発育性股関節形成不全症、Perthes病、大腿骨頭すべり症の診断と治療を取り上げた。さらに、治療に難渋する小児期発症の大腿骨頭壊死症、迅速な診断と対応が求められる化膿性股関節炎に焦点をあて、最後に外傷性、炎症性、麻痺性、腫瘍性疾患といった多様な病態を俯瞰できる構成とした。

本特集が読者の先生方にとって日常診療の確かな指針となり、適切な初期対応と円滑な専門医連携につながる一助となれば幸いである。そして何より、小児股関節疾患に罹患した子どもたちが、将来にわたり良好な股関節機能を維持し、健やかに成人期を迎えられるようになることを切に願っている。

（鬼頭浩史）